

着果処理が不要で、果実品質が優れる ナス新品種「^{しょうた}省太」

野菜部

1 背景、目的

ナスの促成栽培では、果実肥大を良くするために開花時の花に着果促進剤を散布します。この処理はほぼ毎日行われるとともに労働時間が長いため、生産者の大きな負担になっています。また、現在栽培されている品種「筑陽」では厳寒期に果実が細くなりやすく、ボリューム感が不足することがあります。

そこで、着果促進処理をしなくても果実が肥大し、厳寒期にも果実が太くなる単為結果性ナス品種を育成しました。

2 成果の内容、特徴

- 1) 「省太」は、「筑陽」および「黒陽」を種子親とし、単為結果性ナス系統「AE-P03」および「AE-P08」を花粉親として育成した2つの固定系統を、交配してできた単為結果性のF1（雑種第一代）品種です。
- 2) 従来品種「筑陽」と比較して、果実の首径および最大径ともに大きいことから、厳寒期の果実ボリュームに優れます（表1、図2）。
- 3) 「省太」の単為結果性は、促成栽培期間を通して安定しており着果処理が省略できます。その結果、労働時間が約20%（10a当たり336時間）減少します（図1）。

3 主要なデータなど

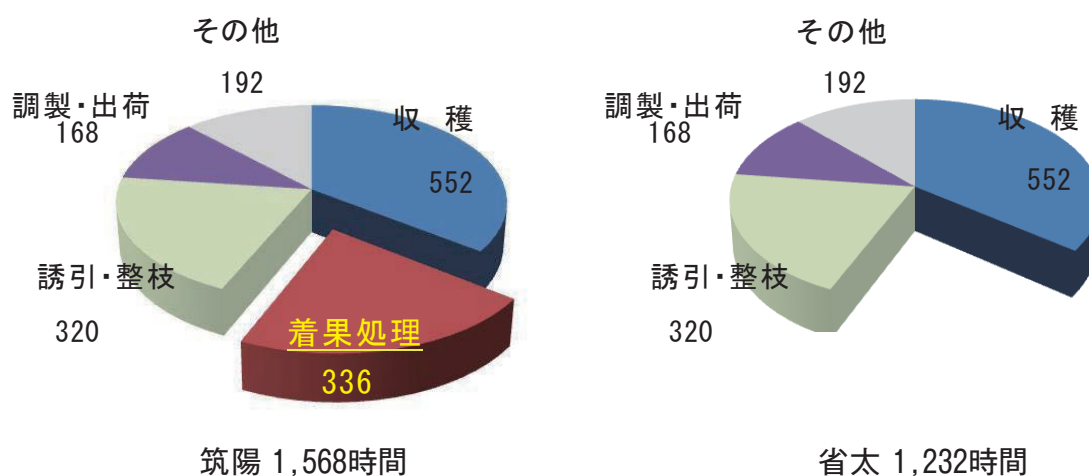


図1 ナスの主な作業と労働時間 (10a当たり)

表1 「省太」の収量性および厳寒期の果実形状

品 種	開花数 (個/m ²)	着果率 (%)	収穫果数 (果/m ²)	総収量 (kg/m ²)	果重 (g)	首径 (cm)	果実最大径 (cm)
省 太	124	96	118	17.1	128	3.2	4.3
筑 陽	130	95	126	17.2	118	3.0	4.0

- 注) 1. 開花数、着果率、収穫果数、総収量は平成21年栽培値。果重、首径、果実最大径は平成22年12月～23年3月に収穫した果実。
 2. 筑陽は4-CPA剤 (トマトーン60倍液) による単花処理を行った。



図2 厳寒期に収穫した果実の状況

- 注) 1. 左:「筑陽」、右:「省太」。
 2. 平成23年2月7日撮影。